

本郷・菊坂界隈の今昔

文京区には、文京出張所のほかに後楽ポンプ所と湯島ポンプ所があります。それぞれの近くには、六義園（旧柳沢家の下屋敷）、小石川後楽園（旧水戸徳川家の上屋敷）、旧岩崎家住宅（元榊原家屋敷）があり、都会の中の数少ない緑地として、一般に公開され憩いの場となっています。

台地と、川によって侵食されてできた小さな谷が織り混ぜられた、複雑な地形を呈する地域です。江戸時代、台地上には大名や旗本の屋敷が数多く構えられ、谷には田圃が拓かれました。台地を貫通する中山道や岩槻街道は、往来する人々で賑っていました、また、動坂、富坂、切通坂などの坂が台地と低地をむすんでおり、低地には小石川、藍染川など清流が流れていました。今回の職場界隈探訪は、後楽ポンプ所と湯島ポンプ所の間地点にあります。本郷の菊坂界隈に的を絞り、ここにかつて住んでいた文学者たちの旧跡を訪ねることにしました。



▲ 菊坂界隈の地図

地下鉄丸の内線の本郷三丁目下車し、本郷通りを北に辿ると、春日通りとの交差点の交番近くに「本郷薬師」があります。昔からこの緑地は、見世物小屋が立ち、露天商が並び、本郷の花といわれる賑いをみせていました。薬師堂に行く参道の本先を左に入る道が「菊坂通り」です。言問通りへ通じています。

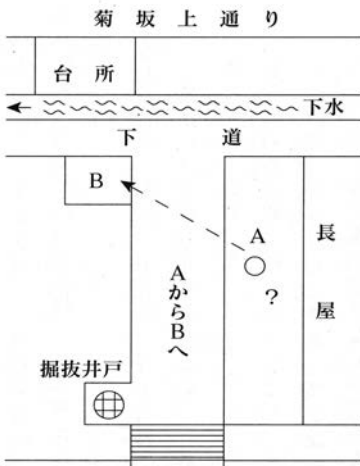
菊坂通り

明治十一年に作成された「実測東京全図」の一部です。台地と低地がケバではっきり区分されていますので、菊坂通りが、台地の上を通る中山道（本郷通り）から分かれて低地に下り、谷沿いに伸びているのがわかります。これ以前の、天保十四年（一八四三）に作られた「御江戸大絵図」では、この通りの辺りを「キクサカ丁」と記しています。

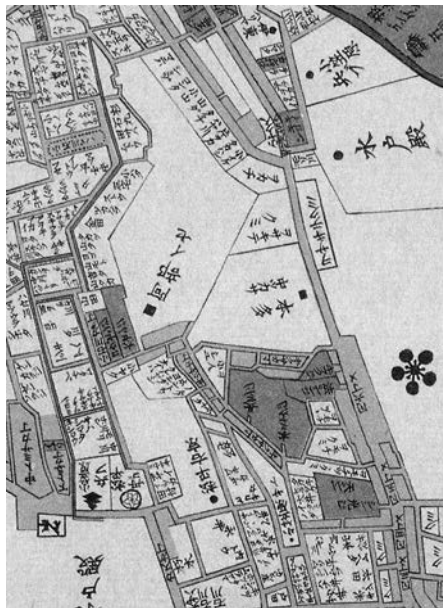
ちなみに、菊坂の名前のいわれは、寛正元年（一四六〇）頃、本郷が町屋となった時、一帯が菊畑であったからだそうです。坂沿いの細長い一面を菊坂町と称しました。

樋口一葉の旧居

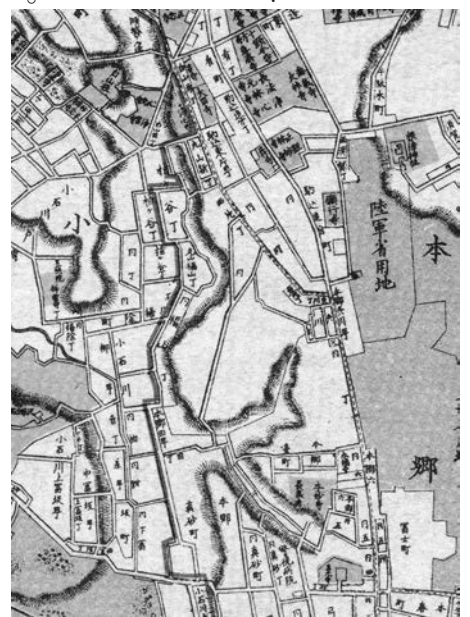
明治二十三年から三年間ほど、樋口一葉は母と妹と三人で、この菊坂町の貸家に住んでいました。菊坂通りに並行して走る下道（したみち）の路地裏です。一葉が十八〜二十一歳の頃で、他人の衣



▲ 一葉の菊坂の旧居周辺



▲ 御江戸大絵図



▲ 実測東京全図

『あの三四郎池のあたりを水源とした川が、三丁目の方へ流れくだり、燕楽軒のあたりから今の菊坂通りを千川に注いだ川があったという。今は暗渠となっていて、所どころのマンホールのそばで耳をそばだてると、たしかにせせらぎの音が聞こえる』

と、紹介されています。いつ頃、暗渠化されたのか定かではありません。

服の洗濯や針仕事で生計を立てながら、小説家を目指して時間を見つけては上野の図書館に通い古典文学を勉強していました。初めは長屋住まいでしたが、手狭だったため、ほどなくして同じ路地の反対側の一軒家に移っています。下道に面しており、脇には下水路が流れていました。この下水路は、江戸の昔から流れていたようです(「御府内備考」)。「ぶんきょうの歴史物語」に、「現東大構内から流れ出て、菊坂町の下道を通り、旧田町で旧森川町と西片の間の清水橋下を流れる川と合流し、さらに千川(小石川のこと)と合流して神田川に注いだ。」とあります。「大正・本郷の子」(玉川一郎著、青蛙房刊)にも、



▲現在の菊坂の路地・杉山八郎 画

一葉の歩いた情景

「完全現代語訳 樋口一葉日記」(高橋和彦著、アドレエー刊)により、この頃、一葉が歩いた本郷界隈の情景を追体験してみましょう。

『図書館へ行こうと思って、また出かける。空には雲一つなく、焼きつくすような太陽の光、煙かと思えるほどの街路の砂ぼこりなど、暑いことはなはだしい。大学を通り抜けて不忍池の端へ出る。茅町あたりから蓮の花の清らかな香りがただよって、すがすがしい気持ちになった。競馬場の柵が作られていたのは見苦しくてがっかりしたが、…。東照宮の石段を登る時、さつと吹きおろす風に杉の葉の露がこぼれるのも本当に涼しい。ここばかりは全く夏とは思われないほどでした』

ここで言う図書館とは、上野公園内にあった帝国図書館のことです。また、大学とは今の東京大学です。



▶大正時代の空橋



▶現在の空橋

『近道を通り、谷中から帰ろうと歩いてくると、夕日も次第に薄れ、夕焼けの紅色だけが残って、「あした天気になーれ」と唱う子供たちの声も、家路を急ぐ身にはせきたてられるように聞こえるのでした。道路端に床几（しようにぎ）というものを出して、洗いたての糊のきいた浴衣を着て、団扇で胸をあおいでいるのは、いま水から上がったばかりなのだろう』

『陸橋の下を通る時ふと見ると、若い学生らしい男たちが欄干にもたれて下を見おろしてた。何だかひそひそと話しては笑ったりしている。知らない顔をして急いで通ると、一斉に手を叩いて、「こつちを向け」などと言う。どういふつもりで言うのだろうか。いやしくも学問をする人のしわざだろうかと思うと、なさけない気持ちになった』

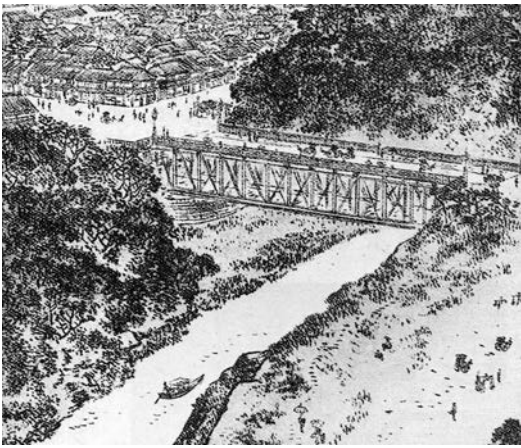
この陸橋は、旧森川町の高台と西片町の高台との間の谷筋にかかる空橋（からはし。清水橋ともいう）のことで、いまでもほぼ同じようなたたずまいで架かっています。

この三つの情景は、ともに明治二十四年八月八日の同じ日の記述です。

『お茶の水橋が開通になったらしいので、さあそれを見に行こうと邦子に誘われ、母上も「見ておいで」とおっしゃったので、家を出た。鍍（あぶみ）坂を登り切る頃月が出た。軒も台地も一面に霜が降りたように真白で、空気はまだ寒からず、月と一緒に連れだつて歩くのも面白い。月光は白く川を照らし、行き交う舟の灯りが水に映り、金波銀波がよせてはくだけ、安らかな光も大そう美しい。森はさかさまに姿を映し、時々水の上だけ雲がかかるのもよい。薄霧が所々に立ち、遠方は電灯の灯がぼんやりとかすかに見えるのも面白い』（二十四年十月十七日）

お茶の水橋は明治二十四年十月十五日に竣工しています。それまでは、湯島と駿河台との間は渡し舟が通っていました。

『帰り路の切通し坂のあたりの景色



▲ お茶の水橋、山本松谷 画

が何とも言えないほど美しい。一きわ高く聞こえるのは号外を売りながら来る新聞売りの声。またあちこちの辻では壮士とかいう人が世相を風刺した文章をつくり、「鉄石心」とか題を付け妙な節回しで歌っている。郵便局には灯りがあかあかと輝き、配達夫の出入りがはげしく、電話交換所は如何にも忙しそうだ。また警察に出入りする外套姿で襟を深々と立てているのは探偵らしい。金ボタンに角帽の学生が二、三人連れで入っていく。寄席は女義太夫だ。身なり服装だけではどこのお姫様が奥方かと思われる人が、主人とも思われない人に手を引かれて楽しげに話して行くのを聞くと、味噌こしをさげて豆腐屋に行っているようだ。文明開花というべきだろうか』（二十六年二月七日）

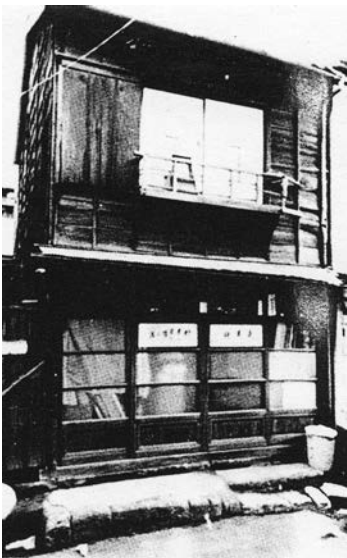
『九段に行き着いた頃、はるか南の空がぼんやり赤く闇をこがして次第に濃くなっていく。…小川町から万世橋を通り、明神坂で母上の土産に飴を買う。これは母上の好物の一つで、しかも何処のよりも此処のが好きだから。…家に帰り着くまで火事はますます燃え盛って見えたが、まもなく鎮火したようだ』（二十六年二月十一日）

宮沢賢治の旧居

一葉の菊坂の旧居からほんの数分の下道沿いの所に、「雨ニモマケズ」の詩で有名な宮沢賢治が大正十年に二十五歳で上京した時、間借りをした家（二階建ての二軒長屋）がつい最近（平



▲ 九段坂、山本松谷 画



▲ 宮沢賢治の旧居



▲ 坪内逍遙旧居



成二年）まで残っていたそうです。今はマンションになっています。賢治のこの家での生活は、わずか八ヶ月に過ぎませんが、この間、近くの印刷屋でガリ版切りなどをしながら、童話や詩歌の創作に励み、後に刊行された童話集「注文の多い料理店」に収められた「どんぐりと山猫」や「かしはばやしの夜」はこの時に作られたものです。賢治の童話の第一稿の多くは、この時期に書かれたものと言われています。帰郷後、地元の農学校の教師に就いています。

坪内逍遙の旧居

賢治が住んでいた長屋の横の路地の先にある急な階段（炭団（たどん）坂）を上った右に、かつて坪内逍遙が明治十七年から三年間住んでいた屋敷がありました。逍遙が二十五〜二十八歳の頃です。一葉が引っ越してくる三年前まで住んでいたことになります。

この辺りは昔、武家屋敷のあった所で、町名が付いていませんでした。そこで、明治になって限らない繁栄を期待して、砂の真砂が限りのないように

との意味を込めて、「真砂町」と名付けたということです。

逍遙は当時、東京専門学校（現早稲田大学）の講師を務めるかたわら、文学・演劇活動に関心を深めていました。ここで近代文学の理論書である「小説神髓」を発表するとともに、その見本として「当世書生気質」という小説を書いています。自分の書生時代の見聞をもとに、自由に奔放な青春時代を描いたものです。

この建物は、その後「常盤（ときわ）会」という旧伊予藩の育英事業の寄宿舎となり、俳人の正岡子規も学生時代の三年余りをここで過ごしています。現在は建て替えられ、企業の研修所となっています。

石川啄木の旧居

逍遙旧宅の前の道を南に数分行

くと、春日通りに出ますが、向こう側に渡って左に折れてしばらくの所に理髪店があります。その前に、「石川啄木 喜之床（きのとこ）跡」の案内板が立っています。

啄木が明治四十二年の六月から二年余にわたって、久しぶりの家族そろっての生活を再開した所です。

当時ここは弓町二丁目に属し、新装間もない床屋さんで、啄木一家はその二階を借りていました。

啄木が二十四〜二十六歳の頃です。新聞社の校正の仕事についていました。生活との戦いのあけくれでしたが、優れた作品も数多く生れました。

歌集「一握の砂」は、この時期に出版されたものです。その中からいくつかを次に紹介しましょう。



▲ 啄木旧居（明治村移築後の喜之床）



▲ 現在の喜之床

はたらけど はたらけど 猶（なほ）わが生活（くらし） 楽にならざり ざっと手を見る

とある日に 酒を飲みたくて ならぬごとく 今日（けふ） われ切（せら）に 金を欲（ほ）りせり

友がみな われよりえらく 見ゆる日よ 花を買ひきて 妻としたしむ

ところで、啄木は質屋通いをしたり、知人・友人から借金を重ねていましたが、近くの菊坂通りにある松坂屋質店にも通っていたそうです。こんな話があります。

『私は知らないけど従兄が石川啄木に英語をならったって言ってましたよ。：啄木は質を入りに来て、客が立て混んだりすると、中

学生だった従兄に英語の復習なんかしてくれただそうですよ。そうすりゃア質値も上がるつてもんでさア』（「大正・本郷の子」）

なお、この通りの言問通り寄りに、伊勢屋という別の質屋がありますが（現在は廃業）、こちらは一葉が懇意にしていたしばしば利用していたところです。

林芙美子の足跡

菊坂通りに昔、梅園という汁粉屋がありました。大正から昭和にかけての頃です。昭和初期に、まだ世に出る前の林芙美子が近くに住む徳田秋声を訪ねた際、一緒にこの店で汁粉を食べています。芙美子の「放浪記」に、



▲ 伊勢屋質屋跡（杉山八郎 画）

『思いあまつて、夜、森川町の秋声氏のお宅に行ってみた。：金の話も結局は駄目になって、：。「ね、先生、おしるこでも食べませうよ。」：私の心は鎖につながれた犬のような感じがしなくてもなかったけれど、非常に腹がすいていたし、甘いものへの私の食欲はあさましく犬の感じにまでおちこんでしまっていたのだ。： 梅園と言う待合のやうなおしる粉屋へはいる。黒い卓子について、つまみのしその実を囓っていると、ああ、腹いっぱい茶づけが食べてみたいと思った』

との一節があります。この店は、当時、東京でも有名な高級な汁粉屋の一つで、大正の中頃でも汁粉が十銭、栗ぜんざいが十五銭もしたそうです。当時の汁粉屋は、現在の喫茶店のようなものだったのでしょう。

徳田秋声の旧宅

さて、秋声の住んでいた家は、今でも東京都の指定文化財としてそのままでの姿が残っています。明治三十九年にここ旧森川町に移り、昭和十八年に亡くなるまで住んでいました。秋声の本格的な作家活動はここで始まっています。「徴」、「あらくれ」、「縮図」などの自然主義文学の名作が生まれました。

古い木造家屋

旧森川町は、岡崎藩の屋敷があつた所ですが、明治になってからは、地方から上京して来た学生や勤め人などを相手にした下宿屋が、数多く建てられました。啄木が一時住んだことのある蓋平館もこの一画にあります。その中でも「本郷館」は、大学に通う留学生や地方からの資産家の子弟が入る高級な下宿屋として知られていました。明治三十八年に建てられた木造三階建ては、現在、アパートになっていますが、当時のままのたたずまいを保っています。

この町には、秋声のほかにも、二葉亭四迷、宇野浩二など多くの文人が住



▲ 徳田秋声の旧居（現在）

んでいました。

また、近くには、かつて菊富士ホテルがあり、帝国ホテルと並ぶ威容を誇っていました。ここに止宿して執筆・

創作に励んだ作家、芸術家は、尾崎士郎、広津和郎、坂口安吾、竹久夢二などと枚挙にいとまがありません。残念ながら昭和十九年に廃業し、その建物も戦災で焼失してしまいました。

なお、ここから少し離れた弥生二丁目に、竹久夢二美術館があります。大正ロマンの代表的な画家であり詩人であった夢二の生涯と芸術の足跡をたどることができます。

菊坂通り奥の「馬つなぎ場」

菊坂通りの奥に、かつて「馬つなぎ場」がありました。肥車などを引いて来る馬をつないでおく場所、二本の杭が立っていました。関東大震災前のここでのエピソードです。



▲夢二の絵



▲本郷館（現在）

『馬は生き物だから適時にポタポタ、ジャージャーとやらかす。するとそれが蓋もしていない小溝に流れたり、裏庭に浸入したりするので、たえず周囲の家の人達とモメゴトが起った。しかし、来てくれなくなると、みんな困るし、と言って限られた人達だけが被害者となって泣き寝入りは我慢がならない……。そこで、汚い屋さんの談義がはじまるのであった。：伯父の家は使用人も多いし、下宿人も居たし、家作持ちでもあったので、板橋と滝野川あたりの御百姓に汲んで貰っていた。：われわれ子供たちは肥やし泥棒の番をするのも、遊びながらの義務の一つであった。約束してあるお百姓以外の「不法汲み取り」百姓がコッソリやって来るのを、家人に報告するの

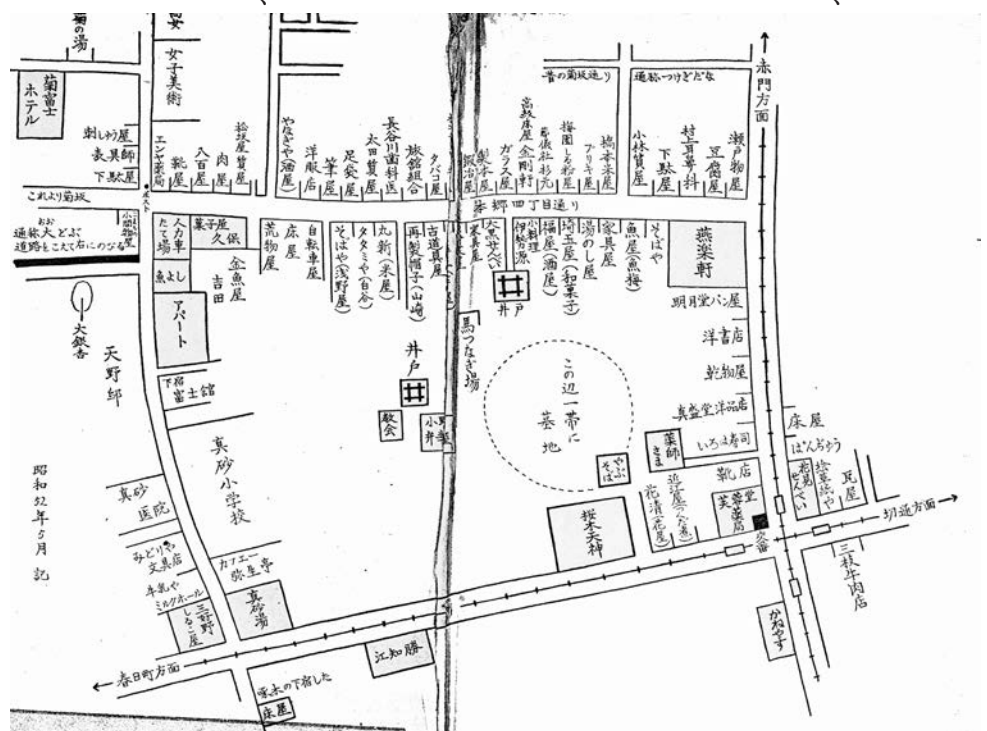
だ』（『大正・本郷の子』）

東京の街は、関東大震災と太平洋戦争の戦火により壊滅的なダメージを受けました。そのたびに不死鳥のように復興してきましたが、その都度、街のイメージが変わりました。

そんな中で、今歩いた菊坂界隈は、それらの影響を受けてはいますが、ビルの谷間に古い木造の建物がたたずみ、路地の奥に手押しポンプの井戸が見え隠れしていました。そして、なによりもそれらの情景を描写した文章や絵や写真が残っていました。

ある時代を生きた者にとって、忘れられない心のメモは、誰でもどこかに残っていると思います。それらを「聞き書き」や「声のライブラリー」などとして、保存することは大切なことです。

なお、住居表示の改正により、本文に出てきた町名は、現在のものとは異なる場合があります。菊坂町と真砂町は本郷四丁目に、森川町は本郷六丁目に、弓町二丁目は本郷三丁目に、そして田町は西片一丁目になりました。



参考資料（文中で明記したものを除く）

「文京のあゆみ」 文京区教育委員会

「ぶんきょうの史跡めぐり」 文京区教育委員会

「ぶんきょうの町名由来」 文京区教育委員会

「私の文京アルバム」 文京区教育委員会

「街を綴る」 熊田忠雄 自費出版

「本郷界隈」 司馬遼太郎 朝日文庫

（文責 地田）



▲ 武家屋敷の面影を残す旧真砂町の建物